

SY5-3

小児日常診療の中での親子の関係性への気づきと家族ケアの試み

松原 徹

城東こどもクリニック

小児科は子どもが生まれて直ぐから、思春期に至るまで継続して関わる診療科である。産科のある総合病院小児科では出生直後から新生児を診る。胎児期から小児科が関わる施設もある。子ども達は生後2ヶ月から乳児健診や予防接種で小児科を訪れる。保育園や幼稚園に行くようになると毎週のように風邪を引き小児科に通う。小学校に入る頃になると風邪で受診する回数は減るが、頭痛や腹痛など様々な症状で受診する子どもは少なくない。そして受診したその時々の子どもの仕草や表情、親の態度などから背後に親子の関係性の問題が隠れていることに気付くことがある。小児科外来で自分やスタッフが気付くことの多い、親子の関係性のイエローサインを挙げてみる。

乳児

- ・無表情
- ・身体が強ばっている
- ・激しい人見知り
- ・視線が合わない

幼児

- ・落ち着きがなくうろうろ歩き回る
- ・わざとイタズラをする
- ・過度に馴れ馴れしい
- ・診察、特に口を開けるのを拒む
- ・一言も話さない

母親または父親

- ・憂鬱そうな表情
- ・不自然な笑顔
- ・抱っこがぎこちない
- ・些細なことでも厳しく叱る
- ・本人の前で平気で児の困りごとを話す
- ・待合室でスマホばかり見て子どもをみていない
- ・子どもがイタズラしても注意しない

我々小児科医だけでなく、子どもと関わる全ての職種の人々は、関係性障害を抱える子どもが新たに生まれないように、予防的に関わるべきだと考えている。疾病を治療するより予防する方が遥かに容易で効果的であるはずだ。受診した母親のお腹が大きい時には妊娠中の母親を気遣うと同時に、何時も次子が生まれた時によくみられる上の子の反応とその対応をお話する。それが少しでも上の子の関係性障害の予防に繋がるのではないかと信じている。感染症にワクチンがあるように、関係性障害を予防し得るフレーズを我々は養育者に伝える必要があると思う。養育者の育児を否定することなく、労い、不安に共感し、傾聴し、ほんの少しの具体的なアドバイスを伝える事が出来たら良いと思う。

シンポジウムでは外来を受診した事例を幾つか挙げ、自分が気付いた母子の関係性を疑うポイントやその対応について述べたい。どれも一般の小児科外来でよく見る事例である。